バウムテストにおける認知—物語アプローチ

バウムテストを解釈する上で，描画後の質問(Post Drawing Interrogation：以下 PDI)は非常に役立つ。天満ら(2008)の研究では，PDI の語りについて，物語を意識させることで，人物像の特徴が意識化され，自己理解の一助となることが示唆された。

認知—物語アプローチとは，「イメージ表現された作品において，作者が作品の主人公を想定し，それを参考にして自分自身の心理的課題を探求する技法(大前,2010)」で，その過程において物語の作成をおこなっていく。

そこで，PDI と認知—物語アプローチをバウムテストに用い，それぞれバウムテストにおける自己理解において，どういった特性を持つのか検討した。また，認知—物語アプローチの侵襲性について，質問の回答にかかる時間を指標とし，検討を行った。

その結果，PDI は自発的な発言はないものの，必要最低限の質問を行うため，過不足ない回答が得られた。また回答への遅延も少なく，負担は少ないと考えられる。認知—物語アプローチは自発的な発言があり，多くの情報が得られる。そして，自分が木になったつもりで答えることで木と自分を照らし合わせ，自己理解の深まりが見られた。しかし回答の遅延が PDI に比べ優位に長く，侵襲的であると考えられる。